

聖書日課 『からし種』 2022.10.30-11.6

<p>10月30日 (日) レビ記 8章</p>	<p>「今日執り行ったことは、あなたたちのために罪を贖う儀式を執行せよという主の御命令によるのである」(34節)。肉なる人として最初の、主の大祭司。その装束も聖別も儀式も、大祭司自身の罪を赦していただくため。赦された罪人として主の御前に立ち、同じ肉なる人々の罪を赦していただけるように祈り願う役目を、これから果たしていく。</p>
<p>31日 (月) レビ記 9章</p>	<p>「彼らがモーセに命じられたとおりの献げ物を臨在の幕屋の前に持ってくると、共同体全体は進み出て、主の御前に立った」(5節)。かつてファラオに願ったとき「お前たちは怠け者なのだ。だから、主に犠牲をささげに行かせてくださいなど言うのだ(出エジプト5章17節)」と罵倒をもって拒否された、その礼拝を、この日全イスラエルがついに献げることができた。</p>
<p>11月1日 (火) レビ記 10章</p>	<p>「しかし、わたしにこのようなことが起きてしまいました。わたしが今日、贖罪の献げ物を食べたとしたら、果たして主に喜ばれたでしょうか」(19節)。大切な若い命がふたつ、一瞬にして灰となった。事態の收拾に奔走するモーセを黙って見ていたアロンが、ついに口を開いた。子どもたちを失った父親の心情の響きを主も憐れまれ、モーセも心を開いたことだろう。</p>
<p>2日 (水) レビ記 11章</p>	<p>「汚れたものと清いもの、食べてよい生き物と食べてはならない生き物とを区別するためである」(47節)。荒野の生活における保健衛生上の配慮。多くの益鳥や益獣が「食べてはならない」とされるのにも知恵を感じる。ここに記される「汚れ」自体は「罪」ではないと覚え、人や生き物を排除することなしに共同体の健康を保って行くため、主の知恵を求めたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.10.30-11.6

<p>3日 (木) レビ記 12章</p>	<p>「産婦は一歳の雄羊一匹を焼き尽くす献げ物とし、家鳩または山鳩一羽を贖罪の献げ物として臨在の幕屋の入り口に携えて行き、祭司に渡す」(6節)。産婦自身がひとりの礼拝者として献げ物を携え行くことが求められている。父や夫の代行で済むことなく、主に委任された創造のわざを労苦して成し遂げた彼女自身が礼拝に招かれている。</p>
<p>4日 (金) レビ記 13章</p>	<p>「七日目に祭司が調べて、患部が以前のままで、広がっていなければ、もう一週間隔離する」(5節)。どんな人でも皮膚病にかかれば、主の御前に仕える祭司が時間をかけて大切に調べるように命じられている。主イエスは重い皮膚病の人々のところに出て行き、触れて癒された。憐れみに満ちたまことの大祭司として、つとめを果たしておられたのだろう。</p>
<p>5日 (土) レビ記 14章</p>	<p>「さきに新鮮な水の上で殺された鳥の血に浸してから、清めの儀式を受ける者に七度振りかけて清める。その後、この生きている鳥は野に放つ」(6-7節)。癒された人の解放感を表すかのように、一羽の鳥が野に放たれる。この鳥の自由は、殺されたもう一羽の血によるもの。イエス・キリストの血によって罪赦され、自由を与えられたこの身にも似ている。</p>
<p>6日 (日) レビ記 15章</p>	<p>「祭司は一羽を贖罪の献げ物、他の一羽を焼き尽くす献げ物として主の御前にささげ、彼女の異常出血の汚れを清めるために贖いの儀式を行う」(30節)。「異常出血の病状」は古代の人々に理解不能の怖れを生んだのだろうが、その偏見に苦しめられた女性たちを想う。主イエスの「長血の女」への癒しの宣言がどれほど大きな解放をもたらしたことだろう。</p>